

### 本学学生の正課体育・スポーツに対する意識調査に関する一考察

TAMURA, Yoshio / 田村, 義男 / 五明, 公男 / 富田, 公博 / 笠井, 淳 / 鈴木, 良則 / 吉田, 康伸 / 苅部, 俊二 / GOMYO, Kimio / TOMITA, Kimihiro / Kasai, Astushi / SUZUKI, Yoshinori / YOSHIDA, Yasunobu / KARUBE, Shunji

---

(出版者 / Publisher)

法政大学体育・スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 = The Research of Physical Education and Sports, Hosei University

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

9

(発行年 / Year)

2003-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007605>

## 本学学生の正課体育・スポーツに対する意識調査に関する一考察

An opinion poll toward the college student's physical education and sports

法政大学第一教養部体育研究室

田村 義 男  
五 明 公 男  
富 田 公 博  
笠 井 淳  
鈴 木 良 則  
吉 田 康 伸  
苅 部 俊 二

Faculty of General Education I

Yoshio TAMURA, Kimio GOMYO, Kimihiro TOMITA, Astushi KASAI,  
Yoshinori SUZUKI, Yasunobu YOSHIDA, Shunji KARUBE  
Hosei University

### 1. はじめに

近年、大学設置基準の大綱化、簡素化に合わせ、大学保健体育科目のあり方について抜本的な見直しがなされてきた。必修科目としての規制は取り払われ、多くの大学が保健体育科目の選択化、縮小への移行を余儀なくされた。本学では、この保健体育科目の是非が問われる中、生涯スポーツを見据えた身体活動の重要性を評価し、保健体育科目の必修科目としての位置付けを守ってきた。しかしながら、昨今の教学改革、さらには2003年度から導入される Semester 性への移行などにより、本学における保健体育科目も大幅な転換期を迎えることとなった。

我々は、1989年に本学学生を対象に保健体育についての意識調査を実施した。この調査によって、保健体育科目を、授業形態、授業方法、授業内容、施設、設備などの環境面から捉え、正課体育のあり方やよりよい授業展開のための基礎的な資料としたのである。そして、今この保健体育科目の転換期を迎え、我々は、正課体育のあり方、授業展開についての再認識をしていかなければならない。前調査から10年以上経過し、学生の意識も変化していることが予測される。そこで、本学学生の保健体育、スポーツにおける意識についての調査を再度実施し、保健体育科目の改革、改善について検討することをこの調査の目的とする。

### 2. 方法

本学正課体育受講生を対象とし、質問紙による調査を実施した。対象についての学部別、男女別の人数については、表1に示した。調査は、平成13年11月中旬から下旬にかけて体育授業（本学ではスポーツ総合と称す）内において学生に

質問紙を配布、回答を記入後回収した。質問項目は、前回の調査における質問項目を基本とし、II. スポーツ・体育に関する質問、III. 大学の正課体育に関する質問、IV. 本学の体育授業に関する質問、V. 多摩キャンパス受講生と市ヶ谷キャンパス受講生に関する質問にカテゴリー分けし、質問紙を作成した。また、I. 好きなスポーツ、嫌いなスポーツ、やってみたいスポーツ、やりたくないスポーツに関してもスポーツ種目を記入した。なお、本学の体育授業は、多摩キャンパスと市ヶ谷キャンパスで授業が展開されており、各キャンパスに対しても別の内容による項目を作成した。項目数は121項目で、うち多摩キャンパスの受講生（以下、多摩とする）に対しての質問が16項目、市ヶ谷キャンパスの受講生（以下、市ヶ谷とする）に対しての質問が8項目であった。各項目は、5段階評定尺度法によって評価し、対応する尺度

表1 キャンパス別、学部別アンケート調査対象者

学部		学部	学部	計	
市谷男子	法学部	55	市谷女子 法学部	57	112
	文学部	23	文学部	53	76
	経営学部	58	経営学部	19	77
	計	136	計	129	265
多摩男子	法学部	322	多摩女子 法学部	203	525
	文学部	186	文学部	200	386
	経営学部	381	経営学部	160	541
	情報科学部	47	情報科学部	7	54
計	936	計	570	1506	
全男子	法学部	377	全女子 法学部	260	637
	文学部	209	文学部	253	462
	経営学部	439	経営学部	179	618
	情報科学部	47	情報科学部	7	54
計	1072	計	699	1771	
無効標本数	男子	9	女子	1	10

の程度表現は、「1. 強くそう思う」「2. そう思う」「3. どちらでもない」「4. そう思わない」「5. 全く思わない」を用いた。回答は、「思う」「どちらでもない」「思わない」の3段階評価とし、その際、「強く思う」と「思う」を「思う」、「そう思わない」と「全く思わない」を「思わない」とした。なお、アンケート調査用紙は文末に添付した。

集まった回答は、体育・スポーツ研究センター所員が分担し、各カテゴリーについて各々解析し、考察を加えた。

### 3. 結果と考察

#### (1) 好き、嫌い、やってみたい、やりたくないスポーツについて

本学学生に対して、関心のあるスポーツについてのアンケート調査を行った。質問項目は「好きなスポーツ」「嫌いなスポーツ」「やってみたいスポーツ」「やりたくないスポーツ」の4項目とし、それぞれ該当するスポーツ種目(複数回答可)を記入してもらい、受講キャンパスごとの集計はせずに男女別の集計を行った。集計結果は表2、3に示したが、各項目11位以下の種目に関しては「その他」とした。

表2 関心のあるスポーツについて (男子)

	好き	やってみたい	嫌い	やりたくない
1	サッカー 305	サッカー 378	水泳 116	水泳 134
2	野球 209	野球 85	マラソン 114	マラソン 129
3	バスケットボール 163	テニス 61	バスケット 107	バスケットボール 98
4	テニス 81	バスケットボール 60	サッカー 87	陸上競技 77
5	バレーボール 44	スノーボード 53	陸上競技 79	サッカー 60
6	バドミントン 35	ゴルフ 49	野球 64	野球 60
7	スキー 31	ラグビー 40	体操 56	体操 46
8	水泳 27	スキー 40	バレーボール 45	バレーボール 43
9	卓球 23	バレーボール 36	卓球 38	卓球 24
10	スノーボード 19	ゲートボール 32	テニス 22	テニス 19
	その他 156	その他 378	その他 162	その他 188
	なし 34	なし 106	なし 193	なし 165
計	1127	1089	1083	1060

表3 関心のあるスポーツについて (女子)

	好き	やってみたい	嫌い	やりたくない
1	バレーボール 125	バレーボール 66	マラソン 152	マラソン 180
2	バドミントン 101	スノーボード 62	陸上競技 94	水泳 96
3	バスケットボール 97	ラクロス 43	バスケットボール 73	陸上競技 91
4	テニス 87	テニス 40	サッカー 64	バスケットボール 69
5	水泳 58	バドミントン 38	水泳 63	体操 51
6	卓球 39	スキー 30	体操 63	サッカー 41
7	サッカー 36	サッカー 28	バレーボール 25	野球 19
8	スキー 22	水泳 23	ドッジボール 22	バレーボール 17
9	野球 21	スケート 16	野球 16	ドッジボール 73
10	ダンス 12	バスケットボール 22	テニス 12	相撲 9
	その他 107	その他 16	その他 75	その他 83
	なし 42	なし 80	なし 83	なし 73
計	747	616	743	746

まず「好きなスポーツ」「やってみたいスポーツ」については男女の差は出たものの、10位以内に入っている種目自体は特に大差はなく球技系の種目が大多数を占めた。

男子においては「好き、やってみたいスポーツ」でサッカー、野球、バスケットボール、テニスが上位を占めたが、「やってみたいスポーツ」でスノーボード(5位)、ダイビング(10位)といったニュースポーツも10位以内に入っていた。また「嫌い、やりたくないスポーツ」については水泳、マラソン、バスケットボールといった持久力を要するスポーツが上位を占めた。

次に女子においては「好き、やってみたいスポーツ」でバレーボール、バドミントン、テニスといったネット型対戦スポーツが比較的上位であったが、「やってみたいスポーツ」で男子同様スノーボードが2位に入り、ラクロスといった女子の競技人口が圧倒的に多いものも3位であった。「嫌い、やりたくないスポーツ」については男子同様マラソン、水泳、バスケットボール、陸上競技といったものが上位を占めた。

以上が結果として出たものだが男女共通していえることは、「好き、やってみたいスポーツ」で上位に入っているものは反対に「嫌い、やりたくないスポーツ」でも上位に入っているということから、そのスポーツ種目のメディアの露出度や競技人口の多いもの等が要因として、好き、嫌いではなく関心が高いスポーツであるといえる。逆に時代の流れともいえるが、武道、格闘技といったものはやや関心が薄れてきているといえるだろう。

(吉田康伸)

#### (2) スポーツ・運動に関する質問について

スポーツ・運動に関する一般的な質問として、自己の体力の把握、スポーツ観についての意識に対する調査を行った。14の質問項目の中から、「自分の体力には自信がある(II-1)」「スポーツを観るのが好きである(II-11)」「スポーツ・運動をすることが好きである(II-14)」の3項目を抽出、各項目について解析した。回答は、「思う」「思わない」の2段階評価とし、本設問の解析では、「どちらでもない」の回答は除外した。表4に集計の結果を示した。また、男子と女子において各項目について偏りがあるかどうか検討するため、2×2の分割表を作成し、結果の処理は $\chi^2$ 検定(独立性)によって解析した。なお、危険率は1%水準とした。

表4 スポーツ・体育に関する質問

質問項目		男子(%)	女子(%)	$\chi^2$ 値
自分の体力には自信がある	1)思う	324(45.4)	161(31.2)	24.616**
	2)思わない	390(54.6)	355(68.8)	
スポーツを観るのが好きである	1)思う	793(86.4)	465(83.2)	2.568
	2)思わない	125(13.6)	94(16.8)	
スポーツ・運動をすることが好きである	1)思う	873(92.2)	448(80.7)	42.324**
	2)思わない	74(7.8)	107(19.3)	

\*\*p<0.01

「自分の体力には自信がある(Ⅱ-1)」の項目では、男子714名中の390名(54.6%)が「思わない」と回答し、女子においても516名中355名(68.8%)が「思わない」と回答した。男女ともに「思う」と回答した人数よりも「思わない」と回答した人数のほうが多くみられた。また、男子の「思う」と回答した人数は、「思う」と回答した全体485名中324名(66.8%)であった。 $\chi^2$ 検定の結果において、人数の偏りが有意であり( $\chi^2(2) = 24.616, P < 0.01$ )、女子は男子よりも体力には自信がないと認めていることが顕著に示された。

「スポーツを観るのが好きである(Ⅱ-11)」の項目では、男子が918名中793名(86.4%)、女子が559名中465名(83.2%)と高い値を示し、男女ともに「思う」と回答した人数は多く、男女ともにスポーツ観戦は好まれている傾向にあることが示された。 $\chi^2$ 検定においても、人数の偏りに有意な差はみられなかった( $\chi^2(2) = 2.568, P < 0.01$ )。

続いて、「スポーツ・運動をすることが好きである(Ⅱ-14)」の項目においては、「思う」の回答で、男子が947名中873名(92.2%)、女子が555名中448名(80.7%)と高い値を示し、男女ともにスポーツ・運動をすることは好まれている傾向にあることが示された。また、「思う」と回答した全体の人数1321名中873名(66.1%)を男子が占め、 $\chi^2$ 検定の結果においても、人数の偏りが有意であった( $\chi^2(2) = 42.324, P < 0.01$ )。したがって、男子のほうが「思う」と回答する傾向の強いことが示された。

以上の結果から、男子は女子に比べスポーツを観戦するよりも、自分で身体を動かしたいと思う傾向にあることが示された。つまり、男子はスポーツを観るのが好きであり、するのはさらに好きであるということである。一方、女子においては、「スポーツを観戦することが好き」と回答した学生と「スポーツ・運動をすることが好き」と回答した学生が8割を超える高い割合で同程度の人数にあり、スポーツは観るのもするのも好きという傾向にあったといえる。総合的な判断として、性差は見られたもののスポーツに対する需要は男女ともに大きいと思われる。「自分の体力に自信がある」という学生は、男子で約5割、女子では約3割の回答にとどまったが、健康・体力の維持増進を基本的目標の1つに掲げる本学の体育授業の重要度は高いと推察される。

(荻部俊二)

### (3) 大学の正課体育に関する質問について

大学の体育に対する考え方を広く質問した。項目数は47項目であり、その中から以下の6項目を取り上げ考察する。「大学で体育があるとは思わなかった(Ⅲ-1)」(図1)

男子全体では「そう思う」と回答した人数は、1071名中463名(43%)、「思わない」439名(41%)であった。「そう思う」が若干多いが4割強でほぼ同じ割合であった。女子全体では「そう思う」と回答した人数は、718名中430名(60%)、

「思わない」が196名(27%)であった。「そう思う」では男子よりも女子の割合が高い結果となり男女間で差が見られた。この結果は、大学での授講科目に対して、基礎科目である体育に関して特別な期待がそれほど高いものではなく、女子については特にその傾向があるものと思われる。男子では「思わない」で4割の回答が有り、必要性を感じてないとは考えにくいと思われる。

「体育授業で満足感を得ることが多い(Ⅲ-13)」(図2)

男子全体では「そう思う」428名(39%)、「思わない」254名(24%)、女子全体では「そう思う」255名(37%)、「思わない」161名(23%)で男女共にほぼ同じ割合であった。多摩、市ヶ谷で比べると男女共に全体とほぼ同じ割合で差は見られなかった。満足感を感じているかいないかは、「そう思う」が「思わない」を上回っていることから、これは授業内容が十分受け入れられているものと思われる。

「体育の授業を受講して楽しい(Ⅲ-16)」(図3)

男子全体では、「そう思う」605名(57%)、「思わない」121名(11%)、女子全体では「そう思う」397名(56%)、「思わない」95名(14%)であり、男女共にほぼ同じ割合であった。多摩、市ヶ谷で比べると、男子では大きな差は見られなかった。女子の「そう思う」で約1割ほど市ヶ谷が高い割合を示した。男女共におよそ6割のものが「そう思う」と答え授業内容に十分満足し、楽しく感じているものと考えられる。他項目で技術の向上に付いての質問も有ったが、学生は技術面での向上を求めることより、活動事態を楽しみたいという目的意識によるものがこのような結果として表れたと考えられる。

「体育授業は気分転換に役立つ(Ⅲ-20)」(図4)

男子全体では、「そう思う」728名(68%)、「思わない」127名(12%)、女子全体では「そう思う」475名(68%)、「思わない」83名(12%)で男女とも同じ割合であった。市ヶ谷の女子で「そう思う」(74%)が最も高い割合であった。男女共に「そう思う」が7割に近い回答をしている。これは日頃の運動不足の生活が伺われる。体育授業での身体活動は、ストレス解消や身体活動の心地よさを感じているものと考えられ、リフレッシュに効果を認めているものと推察できる。

「体育授業で新しい友達ができた(Ⅲ-23)」(図5)

男子全体では「そう思う」780名(72%)、「思わない」96名(9%)、女子全体では「そう思う」592名(83%)、「思わない」43名(6%)であった。男子では「そう思う」が7割を超え、女子では8割超が「そう思う」と回答している。多摩、市ヶ谷で比べると、「そう思う」が多摩(71%)、市ヶ谷(83%)と市ヶ谷が高く、一方女子では多摩(86%)、市ヶ谷(72%)と多摩が高い値であった。新しい友達ができたとするものは、学生生活において友人の存在は大きなものであり、その友人を作ることのできる体育授業は、重要な位置づけがされていると言える。

「体育授業で教員は学生と共に課題に取り組んでいる(Ⅲ-40)」(図6)

男子全体では「そう思う」519名(49%)、「思わない」149名(14%)、女子全体では「そう思う」405名(58%)、「思わない」68名(10%)であった。「そう思う」で男子よりも女子の方が高い割合であった。多摩、市ヶ谷で比べると、「そう思う」で男女共に(男子多摩48%、市ヶ谷53%、女子多摩55%、市ヶ谷69%)若干ではあるが市ヶ谷が高い割合であった。

「そう思う」が男子よりも女子が高い事は、女子クラスにおける、授業展開が導入方法としてより基本的課題から入っている事が考えられる。これは教員の評価に繋がるものと考えられるが、男女共に「思わない」は1割程度と低く、「どちらでもない」を除外した割合(「そう思う」男子78%、女子86%)でみると「そう思う」が約8割の高い値を示した。これは学生から高い評価を受けていると考えられる。

(笠井 淳、鈴木良則)

#### (4) 本学の体育授業に関する質問について

ここでは「スポーツ種目の種目数を増やしてほしい(V-1)」から「体育授業によって体力が向上した(V-18)の各設問のうち、学生たちが教員をどのような存在として認めているか、体力測定実施の意義、体育の授業内容充実或いは改善を念頭にいれ、次の6項目についての調査結果と考察を行った。

「体育担当の教員のほうが他の教科の教員より身近に感じる(V-9)」(図7)

多摩・市ヶ谷共に男子では「そう思う」と回答人数は1073名中、547名、(50.9%)女子は698名中、405名(58.0%)であった。市ヶ谷の女子は129名中、83名(64.3%)が「そう思う」と答え、高い数値を示し、多摩の女子332名中(56.0%)との間に有意差( $t=8.470$   $P<0.05$ )が見られた。また、「そう思わない」は男女とも全体の13%と低い数値を示した。この数値から男女共に「どちらでもない」を含め約9割が他の科目の教師より体育教員に対して親近感をもっていると推測できる。大学正課体育の設問「体育授業で満足感を得ることが多い(III-13)」の男女約35%、「体育の授業を受講して楽しい(III-16)40~45%の数値を示している項目と同様の結果がみられ、教員と学生との親密感の強さが「満足感」、「楽しい」との深い関係性があることを裏付けている。体育授業は教員と学生とのところと体のコミュニケーションから成り立っており、教員との親近感をもつことは学生にとってスポーツへの興味、スポーツ技術向上の一つの大きな要素であり、教員を身近な存在として認めていることは指導上有益であると考えられる。

「年度当初の体力測定は自分の体力を知る上で意味がある(V-11)」(図8)

男子は全体の550名(51.4%)、女子は341名(49.0%)が「そう思う」と回答し、「そう思わない」との回答は、男子全

体で212名(17%)、女子全体の142名(20%)を大きく上回っている。この数値は、自分の体力を知る上で体力測定実施が役立っていることが伺え、その必要性を感じていると推測できる。また、スポーツ・体育に関する質問「自分の体力に自信があるか(II-1)」で男子の約55%、女子の約69%が「思わない」と回答している。自分の体力と体力測定実施の意義との、相関関係があるかどうか明確ではないが、体力測定が学生にとって自己の体力を知る上で、知り得る機会であることは間違いなく、実施の意義は高いものといえよう。

「体育が選択科目であっても受講したい(V-14)」(図9)

市ヶ谷、多摩の男子で「そう思う」が452名(46.7%)、女子では214名(30.0%)であった。「そう思わない」は男子317名(22%)、女子274名(39%)であった。単純には比較できないが女子は、選択科目にした場合受講しない傾向が数値から推測できる。また多摩の女子の239名の約42%が「思わない」と答えている理由は、選択科目を履修する場合、多摩での受講を想定しての回答と思われる、通学への経済的、物理的負担が大きな要因と考えられる。

「スポーツ総合の授業内容に満足している(V-15)」(図10)

男子では538名(50.3%)、女子では385名(52.2%)が「そう思う」と回答している。「そう思わない」は、男子191名(18%)、女子78名(11%)を大きく上回っている。特に多摩、市ヶ谷の女子、55~58%が満足していると回答している。市ヶ谷男子では45%とやや低い回答であったが、市ヶ谷の男子にとっては市ヶ谷キャンパスの教場が狭く、種目が限定されていることによるものと思われる。現在スポーツ総合は、教場、曜日、時限により種目設定に困難さがあるが、学生の多くは概ね満足しているものと思われる。また、教員諸氏の指導方法等の工夫によるところが大きいものと思われる。

「スポーツ種目の授業内容に満足している(V-16)」(図11)

男子では1069名中、609名(57.0%)が、女子では693名中、389名(56.1%)が「そう思う」と回答している。男女共ほぼ同様の割合で満足と答えている。多摩、市ヶ谷キャンパス別に見ると市ヶ谷が男子50%、女子52%が「そう思う」との回答に対し、多摩は男子58%、女子57%と満足度が高い。また、「そう思わない」の回答は多摩で12~14%、市ヶ谷が10~11%であった。市ヶ谷の学生は、スポーツ種目の選択は調査の段階で既に決定していたものの、シーズンスポーツのスキー、スケートは実施されていない状況での回答であり、夏季休暇中の通学集中、合宿授業などの受講形態による要素が満足度に影響したものと推測できる。多摩の学生においてはスポーツ総合と同様の傾向がみられ、男女共、学生の満足度は高い。この理由はスポーツ種目に選択の幅があり、8割以上の受講生が希望種目の履修を可能にしていることによるものと推測される。格技系から球技系への種目の設

定、学生の志向を考慮した種目配置の効果でもある。今後は、「そう思わない」不満に対する理由を把握し、改善をはかる必要がある。

「大学での体育授業によってスポーツが好きになった（V-17）」(図12)

男子では、303名(28.3%)、女子184名(26.0%)が「そう思う」と回答している。「そう思わない」が男子264名(24.7%)、女子205名(29.0%)であった。「そう思う」「そう思わない」での男女間の有意な差( $t=2.035$   $p<0.05$ )はみられなかったが、多摩の男子、市ヶ谷の女子では、それぞれ29%、31%「思う」との回答が多く、対照的に多摩の女子、市ヶ谷の男子は30%、24%と「思わない」の回答が多かった。また、「どちらでもない」は男女共45~54%あった。「そう思わない」との回答は、大学の正課体育に関する質問「体育授業で満足感を得ることが多い(Ⅲ-13)」「体育の授業を受講して楽しい(Ⅲ-16)」の項目で、男女共に「そう思う」の回答が約4割~6割を占めており、この結果からも、既に高校期までにおいてスポーツが好きであった学生は「思わない」と回答しているものと推測されるが、明確なる判断はさげなければならない。こうしてみると大学での体育授業によってスポーツが好きになった学生が約3割存在していることが判り、本学の体育、スポーツ授業の教育環境と授業内容が高校期と比較して高い水準で行われている評価ともなろう。また、体育・スポーツの意義と必要性は、生涯スポーツの立場からも大学期で重要な意味をもつものとする。

(田村義男)

#### (5) 多摩キャンパスの受講生と市ヶ谷キャンパスの受講生に関する質問について

多摩と市ヶ谷に対しての質問(V-19, 20, 24, 29, 31, 32, 34, 36, 39, 42)の結果を図13から22に示した。多摩の86.7%の学生は、通学にお金がかかり負担であることや、また通学に時間を要すると答えているが、市ヶ谷キャンパスで受講したかったという学生は45.7%であった。体育施設については、自然に囲まれているという環境の良さを含めて76.2%の学生は満足していると答えている。高尾山ハイキングは楽しかったと答えた学生は45.6%であり、多摩キャンパスで受講してよかったと答えた学生は、37.1%という値を示した。

市ヶ谷キャンパスにおいては、体育施設に関しては種目が限定されるにもかかわらず、半数近くの受講生は満足していると答え、多摩キャンパスで受講したかったと答えた学生は11.1%であった。

集中授業での体育授業は、体力的に辛いかという質問では、ほぼ半数の学生は体力的に辛かったと答えている。

以上の結果から、交通費や通学時間の問題もあるが、やはり自然環境に恵まれ、且つ、各種グラウンド、設備など十分

整った体育施設で充実した授業によって、今日特に、運動不足に陥った学生に多摩の体育施設を大いに活用させてやりたい。また各々が、健康の増進と体力の向上をはかり、運動の楽しさを実感し、生涯スポーツの享受能力を高めてもらいたいと願うものである。

(五明公男、富田公博)

#### 4. まとめ

本学正課体育受講生を対象として、正課体育・スポーツに対する意識に関し、質問紙による調査を実施した。

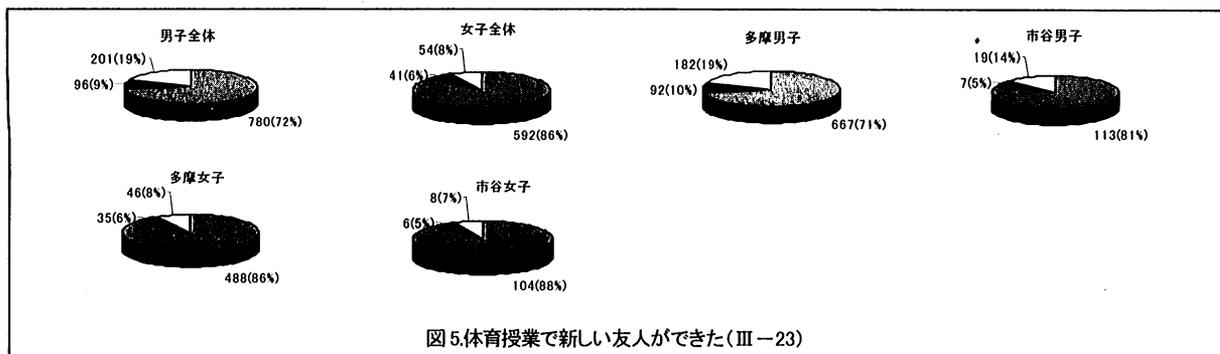
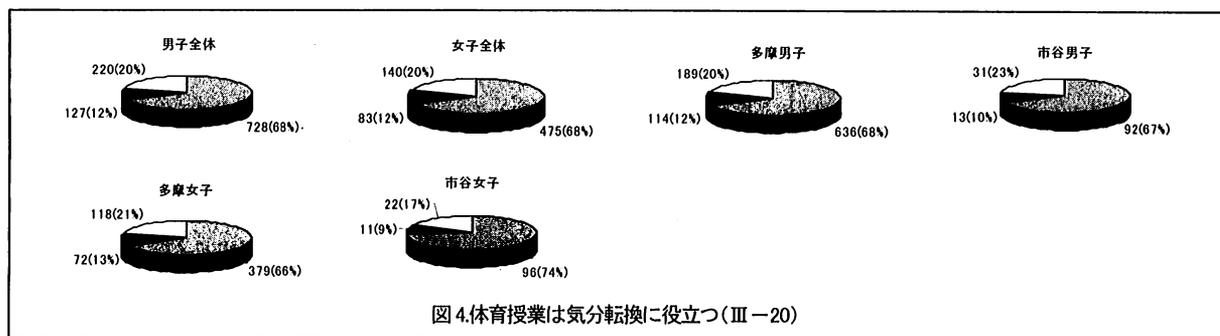
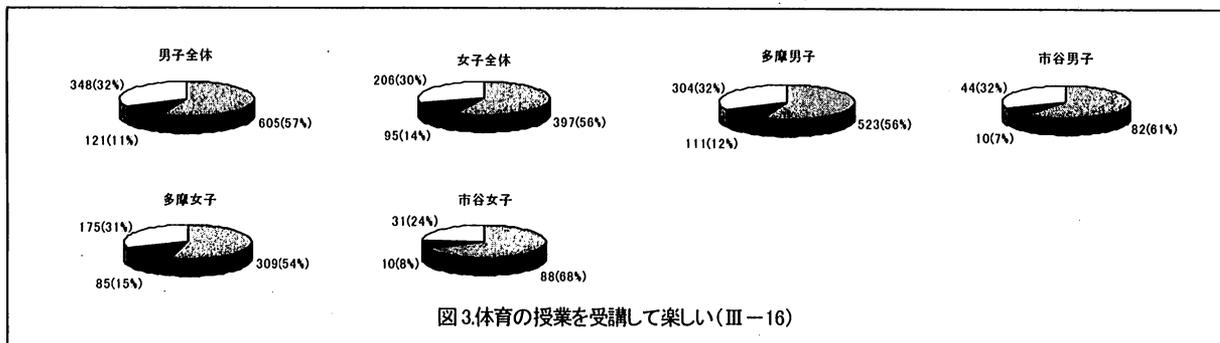
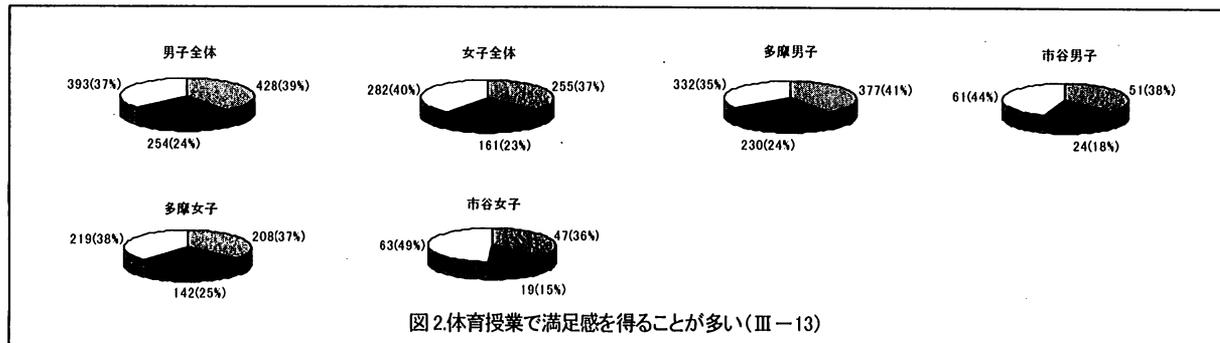
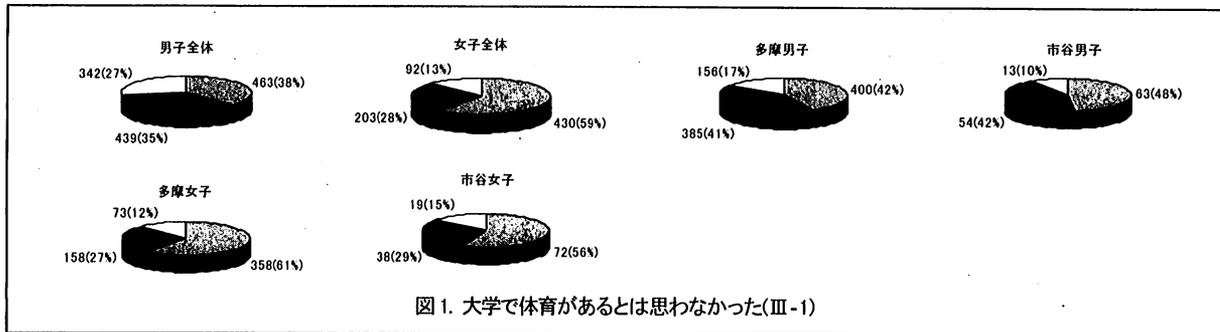
調査の結果、本学学生は、スポーツを好み、体育授業に関しても、「満足感」「楽しさ」「充実感」などに対して高い割合で「思う」と評価していることが示された。「新しい友人ができた」や、「教員に対する親近感」に関しても多くの学生が肯定的な回答をし、保健体育科目の有効性、必然性は明確になったといえる。本学の体育授業に関しても、スポーツ総合、スポーツ種目の各授業について6割近くの学生が肯定的な回答をしている。したがって、本学における体育授業は学生にとって充実したものとなっていると推察される。多摩キャンパスの通学に対する負担、市ヶ谷キャンパスにおける体育施設、設備の不足などからくる学生の不満も明らかとなったが、多摩キャンパスの体育施設、多摩丘陵の自然に対する環境の良さについては高い満足度を示している。通学に対する不満さえなければ、多摩キャンパスの体育授業は、学生にとって満足度の高い授業となっていると思われる。市ヶ谷キャンパスでの体育授業に関しては、限られた体育施設の中で、学生のニーズに合わせた多種多様な授業展開が求められるであろう。

保健体育科目は、教育の中でも人間形成の基礎に深く関わるものであり、いつの時代でも人類の真の幸福は、日々変動する社会の流れに対応し得る、強靱な肉体と不屈の精神を培い、意義ある人生を歩むことにある。更に健康で体力に満ちた身体をつくることは、人類の福祉の根源であり、文化的で豊かな生活を送る基礎でもある。この時期だからこそ理論はもとより、実践実習が最も重要な教育であるといえる。そこで、大学教育の一環として、すべての学生に体育実技を通じて、身体運動の重要性の認識、生涯スポーツの育成、健康的なライフスタイルの確立、更には人間性の発達を理念とするものである。今後は、この調査を踏まえ、本学による保健体育科目のあり方や授業の展開などを勘案しながら更に検討を加えていきたい。

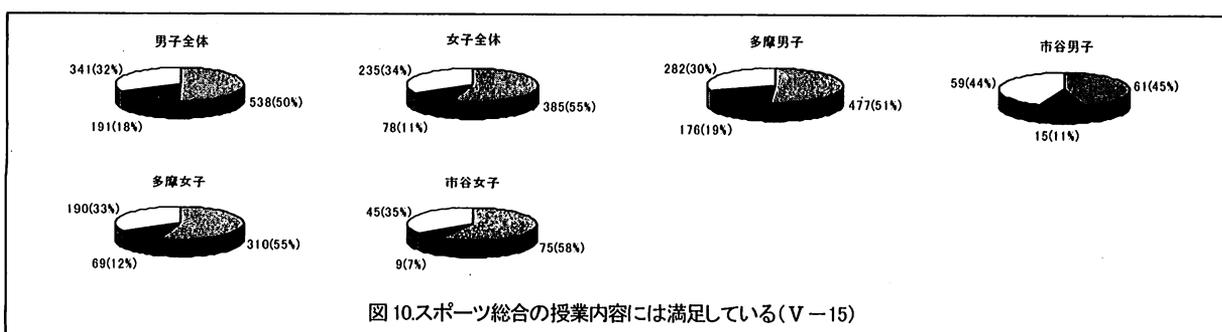
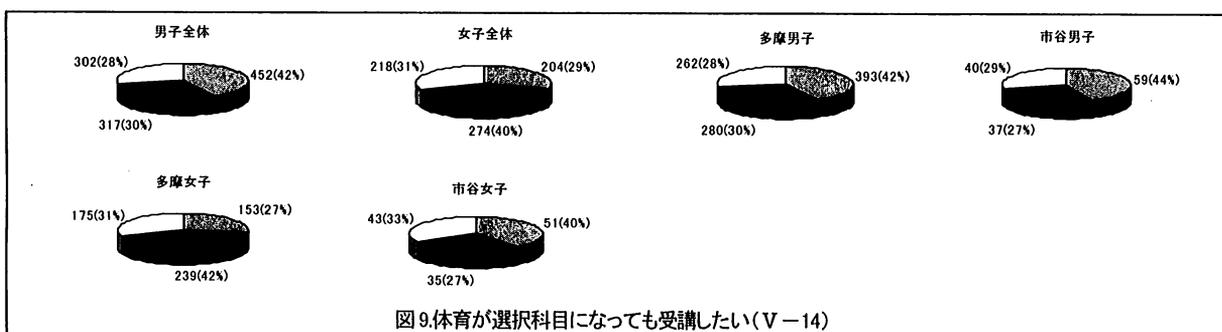
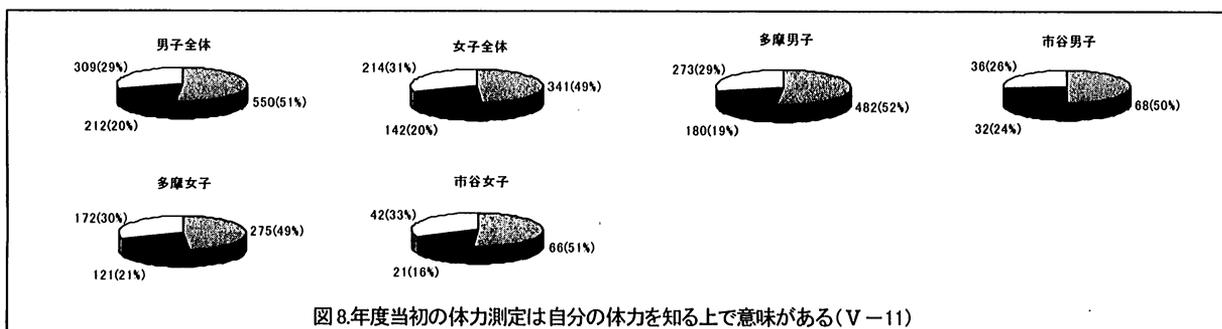
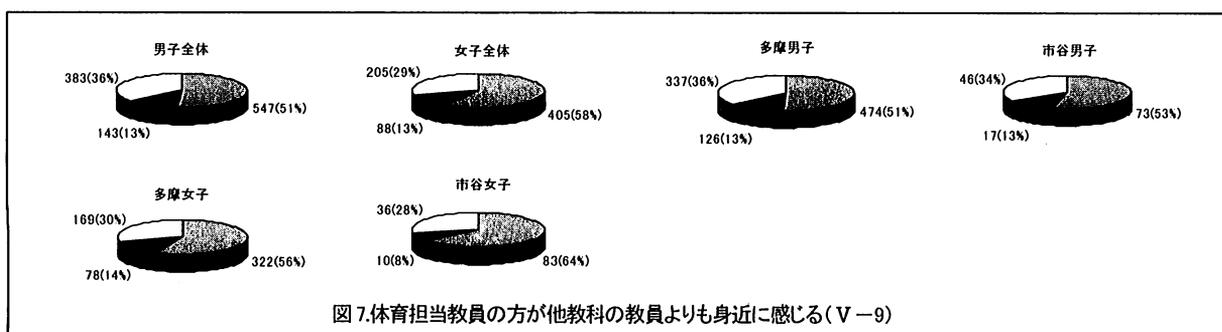
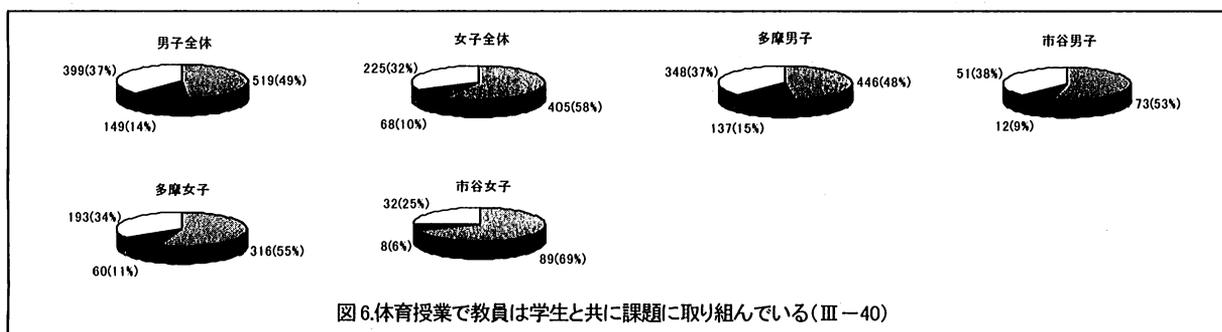
#### 5. 参考文献

富田公博ほか：本学の保健体育における意識調査に関する一考察、法政大学体育研究センター紀要 8、77-83、1990

□思う ■思わない □どちらでもない



□思う ■思わない □どちらでもない



□ 思う ■ 思わない □ どちらでもない

